

草庵仏教

第158号
(発行日)
2003年8月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
mail:kimyou3@zeus.eonet.ne.jp
http://members.tripod.co.jp/souan211

《 聞法会ご案内 》

- * 同朋の会 (念佛寺)
毎月22日午後2時
.....
- * 念仏座談会
第1土曜日午後3時
第3土曜日午後3時
- * 8月の同朋の会は休会

仏願の生起・本末

F 「真宗では私たちにとって念佛聞法が大事だと言われますが、聞法というのはどういうことですか」

D 「仏法を聞くことです。私たちにおいては真宗の教法を聞くことです。これについて聖人は『衆生、仏願の生起・本末を聞きて疑心あることなし。これを聞と曰うなり』と仰せられています」

F 「ここでは『聞』を二度おっしゃっていますね」

D 「仏願の生起本末を聞いて疑いの心がないのを『聞』といわれています。また、何を聞くのかというと仏願の生起本末を聞くのだという意味も含まれています」

F 「聞法というと仏法に関する話を聞くのだと漠然と思つていたんですが、真宗の聞法の中心は仏願の生起本末を聞くことなのですね」

D 「そうですね、これは仏法を聞く側も説く側も十分心しておかないと、真宗の聞法にもならないし真宗の法話にもならないのです」

F 「真宗の聞法のかなめは、仏願の生起本末を聞くこと、これを忘れてはいけませんね」
D 「ええそうですね。しかも聞か

される仏願の生起本末について疑い心がないのを『聞く』というのだと仰せられるのです」

F 「単に耳で聞くだけでは、ほんとうに聞いたことにはならないといわれるのですね」

D 「そうですね。たとえば病気になるってお医者さんに診てもらい先生から指示を仰ぐ。その時、『先生の言うことを聞く』というのは単に先生の話の話を耳で聞いているだけのことでなく、『言うことを聞く』というのは先生の言とおっしゃることを疑いなく信じることですね。それと同じで仏願の生起本末を聞いて、その言葉に対して疑い心がないこと、信じていること、それを『聞』というのだと聖人は言われるのです。ですからこの聞は信であるような聞のことです。聞信とも言います。お聞かせの法を信受しているのを『聞く』というのです」

F 「聞いたことを疑いなく受け入れていることを聞というのですね。では次に、聞くべきところの『仏願の生起本末』というのはどういうことですか」

D 「仏願とは阿弥陀仏の本願のことで、阿弥陀仏の本願とは何であり、どこから起こされ、なぜ起こされ、どのように起こさ

れたのか、そして起こされた本願はどうなったのか。そういう本願の次第を生起本末といいますが」

F 「こうした本願の生起本末はどこで知ることができのでしょうか」

D 「仏説無量寿経(大経)に説かれています。この経典を読むことによって、本願の生起本末を知ることが出来ます」

F 「仏説無量寿経の中で本願の生起本末はどのように説かれていますか。まず阿弥陀仏の本願とは何ですか」

D 「色もなく形も無き真実そのもの、それを法性法身といいますが、その真実が一切衆生を同じ真実に入らしめて仏陀たらしめたい、いわば一切衆生を救いたいと働き出す。真実無限なるものが、あるべからざる状態にいて苦悩せる有限なる者を、あらべき状態(無上涅槃)にあらしめたいと願い働く、仏の本願の起り初めです」

F 「真実無限なるものはどのように働き出されたのですか」

D 「大経ではそのことを私たちに受け取らせたいために釈尊は物語風にお説きになつていきます。それによると、はるか昔、錠光如来が出現されました。世界が真つ暗な闇の状態の中に錠光の穴から差し込む光のように、暗黒のこの世に錠光如来が出現されたのでありましょう。無窮の闇に初めて光が入ってきたとい

うイメージですね。その如来は多くの衆生を救済されてお隠れになり、次に光遠如来がお出ましになった。光遠如来も多くの衆生を悟らせお隠れになった。このようにして五十二の仏陀が出現され、五十三番目に世自在王仏がお出ましになりました。その時に、ある国王が世自在王仏の説法をお聞きになつて非常に感動し、この上ない悟りを開きたいという菩提心を起こし、国をすて、国王の位を捨てて、修行者になりました。その名を法蔵菩薩と申します。この法蔵菩薩は広大な願いを起こされました。これが法蔵菩薩の本願と言われ、この願が成就して法蔵は阿弥陀仏になりましたので阿弥陀仏の本願とも言われるのです」

《 盂蘭盆会法要 》

8月16日(土)
午後2時始まり

*なお、8月は22日の同朋の会と
第3土曜日の念佛座談会は休みます。

F 「法蔵菩薩の大きいなる願いとは何ですか」

D 「一切の生きとし生けるものを平等にこの上ない涅槃（さとりの）領域に入らしめたいという願いであり、衆生が涅槃の悟りを得ること、そしてその道に入る everything が一切衆生の真実の救いでありまことの幸せであるとの思召しです」

F 「法蔵菩薩はなぜそういう願いを起こされたのですか」

D 「私たちの在り方があるべからざる状態に陥（おちい）り、それゆえに罪と苦悩が止むことがないのを憐れまれたからです」

F 「ということは人間は自分の力で真実の在り方へと自分を押し進めることは出来ないのですか」

D 「出来る人もありません。一步一步悟りに近づいていくように修行精進せよ、という教えもあります。現にそういう道に努力を重ねている人たちもいます。しかしこの道は忍耐強く智慧の優れた人へのみ許される、その意味では狭い道です」

*

F 「なぜ法蔵菩薩は一切衆生を救済しようとされたのですか」

D 「それは人間は罪悪深く煩惱が盛んで、みずからの力でまことの自由（さとりの）を得ることができない凡夫だからであり、またこの世は差別動乱の苦しみの世界であることを知見されたからであります」

F 「人間は罪悪深重の凡夫であるから自分の力で自分を救い出すことは非常に難しく、いつまでも苦しみ迷いの境界を離れることの出来ない、そういう人間だと知り抜かれたのですか」

D 「ええ人間が深く自我にとらわれた罪業の人間であり、過去に為した罪に縛られて、宗教的倫理的に悪をつつしみ善を行うことが容易に出来ない具縛の凡夫であると法蔵菩薩は見られたのであります。そして、この世を差別動乱せる苦しみの世であり濁悪の世界と見られています」

F 「罪悪の凡夫と濁悪の世界、まさにどうしてみようもない姿ですね」

D 「その姿を見て、法蔵菩薩は衆生をこの世から救い、この世を超えていく道にあらしめて、ついには衆生を浄化し仏陀たらしめたいと願われました。また人間を救済し浄化していく道によつてこの濁悪の世界を浄化しようとするのであります」

F 「法蔵菩薩は人間とこの世を見て、罪悪深重の人間と濁悪にして苦の世界であることをみそなわし、人をこの苦しみの世から救おうとされるのですか。そして、衆生を浄化することによつてこの世を浄化しようとするのですか」

D 「ええ、そのためにいのちばかりなく光はかりなき如来になり、清浄な浄土を完成し、その

浄土に一切衆生を生まれしめる道を成就したいと願われたのです」

F 「こうした法蔵菩薩の願いが大経に説かれている四十八通りの願なのですか」

D 「そうです。法蔵菩薩の四十八願と言われ、法蔵自身が無上の如来になりたいと願い、またこの上ない浄土を完成し、衆生をそこに生まれさせようと願われしました。この願いはご自身の生命かけての願いゆえに法蔵菩薩の（誓い）といわれます」

*

F 「法蔵菩薩は四十八通りの誓願を起こされたことですが、それからどうなったのですか」

D 「法蔵菩薩はこれらの願を願の通りに実現するため永い間菩薩の修行をされました」

F 「法蔵菩薩の修行とは」

D 「主に六度の行の実践といわれています」

F 「布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の六つの菩薩行を行うことですね」

D 「ええ、そしてすでに法蔵菩薩の修行は成し遂げられて、法蔵菩薩は阿弥陀仏になられ、阿弥陀の浄土は完成し、その浄土に一切衆生を往生せしめる道が仕上げられているのです。完成してから十劫という永い時がたっていると言われています。浄土和讃では（阿弥陀成仏のこのかたは いまに十劫をへたまえり）とありますね。このようにして

法蔵菩薩の願いは成就され、一切衆生が浄土に生まれる法はできあがっているのです」

*

F 「私たちが浄土に生まれる道はどのように完成しているのですか」

D 「私たち一人一人が浄土に生まれて仏のさとりを開く因（たね）を法蔵菩薩はご自身の修行によつて仕上げ、その功德を南無阿弥陀仏の名号におさめて、（南無阿弥陀仏の名号を称えよ、必ず浄土に生まれさせる）と誓つて、私どもに与えてくださるのです」

F 「ナムアマミダブツとお念仏することは南無阿弥陀仏の名号をいただいていることなのですか」

D 「そうです。ちょうど重病の患者が特效薬をお医者さんからいただくようなものです」

*

F 「称えるけれども一向に助けられたような気がしないのはどうしてなのでしょう」

D 「仏になる因（たね）の名号を称えても、（我が名を称えよ、必ず助けらる）という阿弥陀仏の不可思議な大悲の誓いを信じていない場合は、南無阿弥陀仏の名号が我がものになつていないのです。だから南無阿弥陀仏の徳が人生生活の上に表れてこないのです」

F 「ただ口に称えるだけではだめなのですか」

D 「ただ称えるばかりよりないのですが、（称えるばかりで助けらる、その外に何もいらぬぞ）と

仰せ下さる大悲の仏心が感じられていませんから、名号の功德がその人に活性化しないのです。それはちようどお医者さんから特效薬をいただいているながら、手に持っているだけで飲まないのに似ています。あるいは、向こう岸（涅槃界）に渡してくだ

さる船がこちらの岸にまで来て、（すぐ乗りなさい、かならず向こう岸へ渡すから）との仰せを耳に聞いていながら、その仰せを信じないから、本願の船の外にいて乗らないのと同じです」

F 「せっかく、薬を頂いても飲まなければ、薬は効き目を發揮できず、対岸に運んで下さる船が目の前にいても乗らねば、いつまでもこちらの岸壁（苦の世界）にとどまつてしまふばかりで、乗つてやれやれと安心がでないのと同じなのですか」

D 「ええそうです」

F 「阿弥陀仏のご本願がどうして起こされ、なぜ起こされ、どのように起こされ、結果どうなつたかについて、少しわかりました」

（了）

歎異鈔 第十三章第七講

本願にほこるころのあらんにつけてこそ、他力をたのむ信心も決定しぬべきことにてそうらえ。おおよそ、悪業煩惱を断じつくしてのち、本願を信ぜんのみぞ、願にほこるおもいもなくてよかるべきに、煩惱を断じなば、すなわち仏になり、仏のためには、五劫思惟の願、その詮なくやまします。本願ほこりといましまめらるるひとびとも、煩惱不浄、具足せられてこそそうらうげなれ。それは願にほこらるるにあらずや。いかなる悪を、本願ほこりという、いかなる悪か、ほこらぬにてそうらうべきぞや。かえりて、ころおさなきことか。

(歎異鈔第十三章)

現代語訳(本願をほこる心があるからこそ、他力に身をゆだねる自分の信心もまさに定まっていると思われまます。

自分の罪悪や煩惱を滅し尽くした後、本願を信じるといふのであれば、本願をほこる思いもしなくてよいでしょう。しかし、煩惱を滅したならそのまま仏になるのであり。そのようにすでに仏になつたものには、五劫という長い間思いをめぐらしてたてられた阿弥陀仏の本願も、もはや意味のないものでありましよう。

本願ほこりはよくないといましまめる方々も、煩惱を身にそなえ、清らかでないように見受けられます。それは本願をほこり甘えておられることにはならないのでしょうか。どのような悪を本願ほこりではないといふのでしょうか。むしろ

考えがおさなきのではないのでしょうか。

*

「本願ほこり」というのは、本願につけあがつて、ほこらしげにふるまうことである、異義者たちが批判の言葉として用いているのです。唯円房はこの言葉を逆手にとって、「本願をほこる」ほどに本願をつのり全面的によりかかつていてこそ他力の信心は決定しているのだと言われるのです。弥陀の本願は煩惱盛んな凡夫を目当てにたすけたもう大悲の誓いだから、もし煩惱を自分でなくして仏になるのなら弥陀の本願は無くしていいことになり無意味になつてしまします。

批判する異義者の人自身も煩惱を離れていないのだから、やっぱり本願をたのまなくては救われないのであつてみれば、(たとえ本願を信じて悪をおそれなければ往生は出来ない)というのは幼稚な考えである、と批判されるのです。

*

ここで「本願をほこる」ほどに本願をつのり、全面的によりかかつてこそ他力の信心は決定しているのだといわれていますが、この本願一筋の道に関連して、故木村無相さんに「極重悪人唯称仏」という詩があります。

無相さんは、人から色紙に一筆たのまれますと、『正信偈』の「極重悪人唯称仏」というお言葉をよく書いておられました。ご自身の詩にも

「道がある 道がある たった一つの道がある ただ念佛の道がある 極重悪人唯称仏」とあります。

「極重悪人唯称仏」というこのお言葉は端的に第十八願の心を表しています。

すなわち(極重の悪人よ、唯だ仏名を称えよ)であります。これが弥陀の本願です。この願に助けられていくばかりです。この言葉で生きることができ、この言葉で死んでいけるのです。

極重悪人と知らざるゆえに唯称仏がいただけず、唯称仏の大悲が届かぬゆえ、極重悪人に光が来ないのです。

自身を極重悪人と知らざるゆえに、自らを見限ることが出来ないのであり、自らも見限ることが出来ないのであり、(我に任せて念佛申せ)の仰せをたのまぬのであります。

極重悪人と唯称仏(ただ称えよ)の大悲は離すことの出来ぬものであります。

*

*

さて、異義者たちは「弥陀の本願不思議におわしませばとて、悪をおそれざるは、また、本願ほこりとして、往生かなうべからず」といわれるのですが、それは「極重悪人をそのまま救うと誓われた弥陀の本願一つをたのんでいからとて、悪をおそれて慎まないううでは往生は出来ない」といわれるのでしょうか。

この異義に対して唯円房は「本願をうたがう、善悪の宿業をこころえざるなり」といい、異義者たちがこう言い立てるのは弥陀の本願をそもそも疑っているからであり、また宿業ということを知らないからであるといわれます。

宿業とは過去の行為ということですが、ことにこの世に生まれる前の善悪の行いをさします。

さてこの宿業について、法然聖人の有名な法語に

「念仏もうす機は、生まれつきのまににて申すなり。先の世のしわざに

よりて、今生の身をば受けたることなれば、この世にてはえなおし改めぬことなり。

たとえば女人の男子にならばやと思えども、今生のうちには男子とならざるがごとし。智者は智者にて申し、愚者は愚者にて申し、慈悲者は慈悲ありて申し、慳貪者は慳貪ながら申し、一切の人みなかくのごとし。さればこそ阿弥陀ほとけは十方衆生とて広く願をおこしませ

とあります。この法語はざいぶん徹底したお言葉です。ここまで仰せくださらなければ私たちにお念仏のお心が頂けないのではなかるうかと思ひます。

ここで「生まれつき」ということが言われていきます。この言葉はある場合には喜びですが、多くは悲しみの響きを感じます。

法然聖人はここで、どういう人間として生まれるか、男に生まれるか女に生まれるか、それは今の自分にどうすることも出来ないことであり、それは「先の世のしわざ」による、いわば宿業によつて決まるのであるといわれています。また智者に生まれるか愚者に生まれるかという点、これは人間の能力について、知的な能力が高いか低いか、いわば賢いか愚かであるかということ、これも自分にはどうすることも出来ない、それは宿業の仕業であるからと、いわれます。また、人間性において慈悲深いかそうでないか、あるいは物惜しみをする人かそうでないか、これも宿業で決まるのだと。

人間の形、能力、人間性、気質などは直し改めることができない、それは過去の為した行いの結果からたらされたも

のであるからと言われるのです。

*

肉体的な形が変えられないということ、男女の性、背の高さ、顔の形などは基本的に変えることは出来ない。これは多くの人にとっては嘆きです。

人間の能力。ここでは賢愚という知性的な能力が出されていますが、それ以外にも芸術的な才能の有無とか、語学的な才能の有無とか、スポーツ的な才能の有無など、これも多くの人にとっては嘆きです。

そして一番の悲しみは、人間性、人格性、性格、気質の事です。ここでは、やさしい人かそうでないか、物惜しみをする人かそうでないかが言われていますが、その他にも優しさ、まじめさ、おだやかさ、忍耐強さ、などなどの人徳に関わることで、こういう事に対して法然聖人はそれは「前世のあなたのなしわざ」いわばあなたの宿業によって、この世でのあなたの身心を受けたのであるからどうしてみようもないのであると。

これは一見すると後ろ向きな、絶望的であり悲観的な感じがします。

しかし、これを「我が名を称えよ」という弥陀の本願の中で聞くと、この法語のお言葉はなんと大きな慰めでありましょうか。これでこそ人生に救いがあります。

逆に「人生はなせばなる。自分を変えることは難しいけど不可能ではないから、出来るだけ前向きに努力して生きなさい」という世間の常識的立場はいかにも納得はしやすいが、結局「我がちから及ばず」という嘆きが残るばかりです。今、「なおし改めえぬなり」と自らの限界を知り、その私にかけてくださる弥

陀の大悲を聞く。「汝を変革する仕事は我がするから、我にまかせよ」という不可思議の誓いを聞く。ここに宿業は弥陀の大悲を映すものとなり、後ろ向きの人生は光に向かう人生となり、絶望は希望になり、悲観は喜びと変わります。

*

私は重い罪悪をかかえ、死へと急ぐものであるという限界の中で、人間性の貧しさを嘆いて生きるか、それとも「汝の罪を除くは我なり、汝を浄土に生まれさせるは我なり、汝の人間性を仏徳に変えしめるは我なり、我にまかせよ」の大悲の誓約に身をゆだねるかだろうか。あれかこれか、道は二つに一つであります。

法然聖人も親鸞聖人も阿弥陀仏の大悲の誓いを受け入れられました。受け入れた時、限らない光に浴したのです。もはや自分の限界を嘆くのではなく、限界を縁として仏の大悲大悲を讃仰する身となり、讃仰する一生を送られたのです。「如来大悲の恩徳は 身を粉にしても報ずべき事ではないでしょうか。まことに弥陀の本願まことにおわします」のであります。

この宿業説は弥陀の本願と離してしまふと邪見になりかねません。大悲において宿業を知り、宿業において大悲を仰ぐ、それが歎異鈔第十三章の宿業のいわれであり法然聖人のこの法語なのです。

*

なお異義者の「たとえ悪人を救うという本願が不思議であり、本願を信じているといっても、悪を慎まないようでは往生は出来ない」という非難は、今日たとえ「たとえ本願を信じたと言っても社会的な諸問題を担い、社会的な活動に

関わることはないようなら、それはただ内面的な慰めとしての信心でしかなく、真宗の本当の信心ではない」という言い方と似ていないでしょうか。

弥陀の本願を信じて、それぞれの宿業から制限は受けるのは当然で、本願を信じたら即座に生まれつきの性格や気質が変化するわけにはいかならないと思えます。藤原正遠師の歌に

百花みな 香りあるごと 人の世の

人のしぐさに みな香りあり

で、百の花があれば、百の香りがあるごとく、十人いれば十人十色である。それは業報のあらわれともいえましよう。

それを「社会の諸問題に関わらないよいうな人の信心は真宗信心ではない」と限定するのは本願を限定し信心を限定してしまつて、本願の広大さはここにしばみ、無碍光の広大な徳はあらわれないでしょう。人それぞれの体質、気質、性格というものを無視して、たとえそれが非常に願わしい生き方であっても、理想的な生き方をしていく人を真宗信心の人とし、それ以外のありかたを排除するのは尽十方無碍光如来のお徳を制限してしまします。だからそういうように考える人は人間における宿業の深さを知らず、同時に無碍光の徳の広大さを知らない、いわばその人自身本願を疑っているのではないのでしょうか。それをこの歎異鈔では「この条、本願をうたがう、善悪の宿業をこころえざるなり」と仰せられているのでしよう。

人には宿業があつて、いかに真宗の信心をいただいたからといって、すぐに社会的な問題に積極的にかかわって生きるような勝れた人間になるとはかぎりませ

ん。人それぞれの業によって気質や性格が違ふのであつて、その人の関心や志向までもが簡単に変換するとはいえないのです。

信心の徳は人の我執的自我心を砕いていく、いわば浄化していく働きがありますが、その人の個性なり性格なり気質を直接変えるというのではないであります。

ただ仏心大悲によって我執的自我が否定されていくところに、大悲願力の働きによつて人格の変容がなされていくことも事実です。しかし人間性の変容を往生の条件にしたり、信心の姿にするのは間違いだと思ひます。

(了)